

不妊治療について

① 不妊治療の現状

- 日本では、実際に不妊の検査や治療を受けたことがある(または現在受けている)夫婦は、全体で**18.2%**、子どものいない夫婦では**28.2%**です。これは、夫婦全体の**5.5組に1組**に当たります。
(国立社会保障・人口問題研究所「2015年社会保障・人口問題基本調査」による)
- 2015年に日本では51,001人が生殖補助医療(体外受精、顕微授精、凍結胚(卵)を用いた治療)により誕生しており、全出生児(1,008,000人)の**5.1%**で、これは、**約20人に1人**に当たります。
(生殖補助医療による出生児数: 日本産科婦人科学会「ARTデータブック(2015年)」、
全出生児数: 厚生労働省「平成27年(2015)人口動態統計の年間推計」による)
- 不妊の原因は、女性だけにあるわけではありません。男性に原因があることもありますし、検査をしても原因がわからないこともあります。また、女性に原因がなくても、女性の体には、治療に伴う検査や投薬などにより大きな負担がかかります。
- 男性も女性も、検査によって不妊の原因となる疾患があると分かった場合は、原因に応じて薬による治療や手術を行います。
- 排卵日を診断して性交のタイミングを合わせるタイミング法、内服薬や注射で卵巣を刺激して排卵をおこさせる排卵誘発法、精液を注入器で直接子宮に注入する人工授精などの一般不妊治療では妊娠しない場合に、卵子と精子を取り出して体の外で受精させてから子宮内に戻す「体外受精」や「顕微授精」などの生殖補助医療を行います。
- 不妊治療は、妊娠・出産まで、あるいは、治療をやめる決断をするまで続きます。年齢が若いうちに治療を開始したほうが、1回あたりの妊娠・出産に至る確率は高い傾向がありますが、「いつ終わるのか」を明らかにすることは困難です。治療を始めてすぐに妊娠する場合もあれば、何年も治療を続けている場合もあります。

② 不妊治療のスケジュールについて

不妊治療に要する通院日数の目安は、概ね以下の通りです。ただし、以下の日数はあくまで目安であり、医師の判断、個人の状況、体調等により増減する可能性があります。

体外受精、顕微授精を行う場合、特に女性は頻繁な通院が必要となりますが、排卵周期に合わせた通院が求められるため、前もって治療の予定を決めることは困難です。また、治療は身体的・精神的な負担を伴い、ホルモン刺激療法等の影響で体調不良等が発生することがあります。

また、診察時間以外に2～3時間の待ち時間があることが一般的です。

月経周期にあわせて一般不妊治療を何回行うかは、年齢や個人の状況によって変わりますが、3～6回が一般的です。

治療	月経周期ごとの通院日数の目安	
	女性	男性
一般不妊治療	診察時間 1回 30分程度の通院: 4日～7日 人工授精を行う場合、上記に加え、 診察時間が1回2時間程度の通院: 1日～	0～半日 ※手術を伴う場合には1日必要
生殖補助医療	診察時間 1回1～2時間程度の通院: 4～10日 + 診察時間 1回あたり半日～1日程度の通院: 2日	0～1日 ※手術を伴う場合には1日必要

不妊治療連絡カード

事業主 殿

令和 年 月 日

所属.....

氏名..... 印

医師の連絡事項

(該当するものに○を付けてください。)

上の者は、
 { 現在、不妊治療を実施
 または
 不妊治療の実施を予定 } しています。

【連絡事項】

不妊治療の実施(予定)時期	
特に配慮が必要な事項	
その他	

令和 年 月 日

医療機関名.....

医師氏名..... 印